

## 小学校における日本の伝統的な歌唱の授業プラン

～ 長唄手ほどき曲「蟲の聲」を教材として～

### A teaching music plan of Japanese traditional singing in the elementary school

伊 野 義 博

Yoshihiro INO

#### はじめに

学校の音楽授業における日本の伝統的な歌唱の指導においては、音楽が培われてきた文化的背景や伝えられ学ばれてきた方法に配慮しながら授業を構成することが必要だと考える。本稿で示した授業プランは、筆者が継続している小学校での一連の授業のうち、平成17年11月、新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校3年生を対象に、長唄手ほどき曲「蟲の聲」を教材として実施されたものである。教員を対象とした授業公開を目的としているために、基本的には学習指導案の形をとりながら、いわゆる「です、ます」調で書かれている。

論考の内容は、まず、音楽把握にたいする部分と全体の問題について、日本と西洋を比較しながら整理する。次に、模倣や身体性を重視した学習法を生かす方法について述べ、日本の子どものもつ音楽的感覚や感性を出発点とした学習の重要性について論ずる。これらをもとに、具体的な授業プランとして提案する。

#### I 「テントンシャン」か「ミーシーラ」か

日本舞踊（歌舞伎舞踊）と西洋舞踊（バレエ）について、蘆原英了氏はきわめて興味のある比較をされています<sup>1)</sup>。

まず、バレエは、パとポーズの連続で成り立っているとのこと。一つの足から他の足へと重心を移動することを含んだ動きである「パ」と、姿勢すなわち姿やかたちを表す「ポーズ」は、単語が連なり一つの文章ができあがるように連続されて一つの舞踊をつくりあげています。そして、重要なのは、バレエ舞踊は、このパとポーズに分解しうることにあります。それ故に、バレエの学習はパとポーズを一つずつ学んでいくことができます。

一方歌舞伎舞踊の動きは、ジェスト（身振り、仕草、手真似）であるとのこと。ジェストは一つ一つに意味があり、これはパとポーズのように分解することはできません。従って、踊りを学ぶ時は、はじめから終わりまで、全体を通して学ぶことを繰り返します。バレエと歌舞伎舞踊は、「動きの性質が本質的に相違する」わけです。

日本音楽と西洋音楽も基本的にこれと似通った関係を持つと考えられます。例えば「テントンシャン」もジェスト的な性質を持っていると考えられます。

ご存じのように「テントンシャン」は、箏曲「六段の調」の冒頭部の唱歌（しょうが）です。唱歌というものは、日本の楽器を教習する際に節やリズムを唱えるもので、太鼓の「ドンドコドン」「テンツクテン」なども唱歌です。ちなみにゆっくりと「テントンシャン」を唱えてみてください。何となく曲の感じがつかめると思います。

最初の「テーン」ですが、これには、箏の絃（五の絃）をはじいた瞬間の響きの感覚、減衰する音の感じ、拍の長さ（間）、音色、音の高さ、奏法のすべてが含まれています。奏者は「テーン」と唱えることにより、音楽の全体を把握できるわけです。唱歌「テーン」の持つ本質的な性格がこのようなもの故に、ピッチは？リズムは？といったように分解して捉えることは意味をなさないので。蘆原氏の言い回しを真似るならば「音楽の性質が本質的に相違する」のです。

「テントンシャン」は、音の高さの連続（旋律）としては西洋音楽的には「ミーシーラ」（相対音高）となるのですが、仮に「ミーシーラ」として「六段の調」を教えたとするならば、そしてそれは西洋音楽を習得した音楽教師によってしばしばなされることですが、すでに日本の伝統音楽の指導ではないのです。

## II 学習法を生かす

### ・丸ごと学習、唱歌の活用

それでは、日本音楽はどのように学習すればよいのでしょうか。先ほどの唱歌による学習は、伝統的に唱歌をそのまま覚えることから始まります。唱歌を自分のものにしてから、楽器の練習に入るわけです。唱歌を覚えるということは、音楽の中味、すなわち、ふし、音色、リズム、間、等々を全体として把握することを意味します。

こうした唱歌の学習は、一言で言えば丸ごと学習です。従って、唱歌が無い場合、すなわち歌詞のついた唄などの習得も同様になります。曲を分解して覚え、それを統合するといった方法は、日本音楽にはそぐわないわけです。

### ・模倣、繰り返し、身体、動き

丸ごと学習は、師匠の規範をそのまま真似て、繰り返し練習し、師匠の演奏に近づこうとするやり方をとります。師匠の模範演奏、聴唱、模唱が基本です。また、その際、定まった身体の型や手拍子などの動きが伴う場合は、そうした行為も重視します。全身全感覚を総動員して、よく聴き、繰り返し表現していきます。書かれたものは、あったとしても二次的な扱いになります。

こうしたやり方は、とても幼稚に見えるかもしれませんが、伝統的に行われてきた音楽や芸能の学習法です。しかも、「どこが自分の演奏と師匠の演奏との違いだろう。あの演奏に近づくには、どうしたらいいのだろう。」といった学習者の課題意識を生み出し、強い意志を持って実践を継続させていきわめて主体的で知的な学習法でもあります<sup>2)</sup>。

### ・もともと身に付いている自然な学習法

今までの音楽授業の方法とはちょっと違って、子どもがやりにくいのでは？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、よく考えればこのやり方は、子どもがもともと身に付けている自然な学習法の延長上にあるのです。例えば、子どもがことばをどのように覚えたか、例えば、わらべうたの「ずいずいずっころばし」をどのようにしてできるようになったか、を考えてみればおわかりでしょう。状況の中で人の所作をよく観察して、真似て、歌って、手を動かして、繰り返し覚えたわけです。音楽の大抵は言葉がついたものですから、日本語が持っている音楽性にも強く影響されていることは間違いありません。

大人にとっても同じようなことが言えます。例えば、一般的に歌を覚えることを思い出してください。カラオケなどは好例です。規範の丸ごと学習と模倣、繰り返しの連続です。こうした意味においては、日本音楽の学習は、子どもや大人がもともと獲得している自然な学習方法の強化という見方をすることもできると思います。

### III 日本の子どものための音楽学習を

- ・子どものもつ音楽的感覚や感性を出発点として

日本音楽の学習で重視したいのは、日本人が持つ音楽的感覚や感性を出発点とすることです。特に日本語を話し日本の風土の中で生活をしている子どもの音楽性に注目し、それを伸ばしてやるのが大切だと思います。

日本語で生活していると知らず知らずのうちに身体全体が言葉の持つ特性と呼応して音楽的感覚や感性を醸成します。ごく簡単な例をあげるならば、友達同士で遊ぶときに必ずでてくる「セーノ」とか「イッセーノード」といった合図です。じゃんけんをする時、共同で重いものを持ちたりする時、このようにして全員で呼吸を合わせます。また、必ず身体の動きが伴います。この一連の所作の中から生まれる「セーノ」や「イッセーノード」に日本音楽のエキスが含まれています。

すなわち「セーノ」の場合、「セー」と「ノ」のそれぞれの拍は、その軽重、長短など性格が異なり、「セーノ」の組み合わせは日本音楽の表拍・裏拍の感覚そのもので、すべての伝統芸能や音楽につながるリズム感です。

ところが、こういった感覚は西洋音楽とは異なりますから、特に音楽の時間においては否定されることが多くありました。「セーノ」や「イッセーノード」のリズム感で合奏したりするとまったく（西洋）音楽が成立しないからです。これは日本の子どもにとって、とても不幸なことです。

「おかあさん」「なあに」といった日常会話の中にすでに内包された音楽性、そしてそうしてくらしている子どものもつ感性をそのまま伸ばしてあげたいと思うのです。

- ・音楽の特性を把握、文化的意味や価値として認識

日本の子どものもつ音楽的感覚や感性を出発点とした音楽学習のカリキュラムは、どのようなものになるのでしょうか。このことは、音楽科における喫緊の課題です。現在私は二つのカリキュラムプランを持っています。一つは、現行の学習指導要領の諸要素に対応させて日本音楽の特性を把握することができるようにしたプラン、もう一つは、日本の子どもの音楽的感覚や感性と日本音楽の認識法から出発するプランです<sup>3)</sup>。

こうした学習を通して、日本音楽の魅力（特性）を感覚的にも知的にもその両面から把握し、文化的な意味や価値として認識していくことができればと思っています。

### IV 教材「蟲の聲」について

今回の授業では、教材として長唄手ほどき曲「蟲の聲」を取り上げることにしました。この曲は、中内蝶二作歌、杵屋六四郎作曲によるもので、作曲年は大正7（1918）年2月となっています<sup>4)</sup>。邦楽社発行の『吉住慈恭、稀音家浄観校閲、吉住小十郎著、長唄新稽古本』に掲載されています。この稽古本には、新曲として「お月さま」「起き上り小法師」「蟲の聲」「兎と亀」の4曲があり、長唄研精倶楽部（研精会）の選で大正7年2月の第1回試演会に初演したとあります。

すべて中内蝶二の作歌ですが、作曲の方は「お月さま」と「起き上り小法師」が四世吉住小三郎（のちに吉住慈恭）、「蟲の聲」「兎と亀」が三世杵屋六四郎（のちに二世稀音家浄観）となっています。

歌舞伎音楽として江戸で発達した長唄は、幕末になると演奏用の長唄が作られるようになります。長唄研精会は、明治35年に吉住小三郎と杵屋六四郎により創設された、演奏会長唄を中心とした団体です。西園寺公望や福沢諭吉、坪内逍遙などの学者、文人の後援を得て全盛期を迎えます。

さて、これらの曲は「お月さま」「蟲の聲」といった曲名からもおわかりのように、子どもの手ほどきとして作られています。内容も親しみやすく、日本的な情緒を醸し出すとともに長唄の特徴や良さをそなえています。以下に歌詞を添えます。

蟲の聲

つゆふかき あきののべより とらへきて ちまたにひさぐ むしのこゑ  
 ちんちろちんちろちんちろりん たれまつむしの こゑやらん  
 りんりんりんりんりんいんりん すずふるすずふるすずむしが  
 きりきりきりきりきりぎりす がちゃがちゃさわぐ くつわむし  
 うまおひむしも あとおふて ちよんちよんちよんちよん すいつちよん  
 ちんちろちん ちんちろちん ちんちろりんりん ちろりんりん  
 ひやうしそろへて おもしろや

## V お師匠さんの紹介

今回の授業では、お師匠さんとして長唄の稀音家芙喜先生をお招きしました。

稀音家芙喜先生は、新潟で「芙蓉会」という長唄の会を主催されています。新潟だけでなく、東京や静岡など、全国で演奏活動をされています。

三味線を稀音家六遊喜氏、稀音家和喜之助氏に、唄を吉住小七郎氏（のちの日吉小七郎）に師事されました。昭和44年、家元の四世稀音家六四郎氏より名前をいただき、名取りとられました。「蟲の聲」の作曲者は、三世稀音家六四郎氏ですから、今回子供たちは、素晴らしいお師匠さんにお習いすることになります。

お手伝いをさせていただく新潟大学音楽科長唄倶楽部は、稀音家芙喜先生に定期的に長唄をならっている音楽科のメンバーです。

## VI 「蟲の聲」の教材性（音楽特性）

「蟲の聲」の教材性について、考えてみましょう。

### ○音色

「ちんちろちん」「りんりんりん」といった虫の声が中心になっています。それぞれの虫の色の音色や響きの特徴がおもしろいところです。また、子どもは「つゆ」とか「あき」とか「ちまた」とか、それぞれの発音の違いや特徴にも気づくことでしょう。

声の出し方は、それぞれが持っている自分の声を基にした自然な声の出し方を基本とします。「あなたの声、友達の声」の一つ一つが「素敵な声」なのです。これらの声が集まって「みんなの声」なった時の日本的な響きを味わうことも重要な学習です。

今回は焦点を当てませんが、三味線の音色や象徴音も魅力的です。それぞれの虫によりハジキやスクイなどの技法を巧みにお混ぜた表現は実に楽しいものです。

### ○動き・息

唄は、ことばのまとまりが自然に表現されるように、唄い手の呼吸と相まって作られています。このことは、息継ぎの場所に注目すればわかります。ちなみに下に息継ぎごとに区切って書き出してみました。これを声に出して呼んでみてください。唄の骨格が浮かび上がってくると同時に、どのような呼吸（息）の仕方（西洋的にはブレスですが、感覚的に異なります。）をすれば良いのかがわかってきます。

（前略）

ちんちろちんちろちんちろりん  
 たれまつむしの  
 こゑやらん  
 りんりんりんりんいんりん  
 すずふるすずふるすずむしが  
 きりきりきりきりきりぎりす

がちゃがちゃさわぐくつわむし  
 うまおひむしも  
 あとおふて  
 ちよんちよんちよんちよんすいっちよん  
 ちんちろちん  
 ちんちろちん  
 ちんちろりんりんちろりんりん  
 ひゃうしそろへて  
 おもしろや

唄はまた表・裏といった拍の連続でできていますが、この拍の感じがいわゆる西洋音楽と異なるところです。子どもはこのことを感じ取って表現することでしょう。

表現する上で身体の内も大切です。基本的に正座となります。

#### ○ことば・ふし

歌詞からもおわかりのように、この歌には、秋の虫の声を楽しむ日本人の感性があふれでています。歌詞は、自然の音、四季の音、情景、情緒を表わし、五音、七音といったまとまりを基本としながら、日本語の持つことばのリズムとともに心地よく響いてきます。また、「ちんちろちんちろちんちろりん」の例をあげるまでもなく、ふしは、ことばのリズムや抑揚を生かして作られています。これが節回しの特徴にもつながってきます。従って言葉はきわめて重要で、今回の学習では、これをどのように表現してくかが大きなポイントになってきます。

#### ○構成法

三味線の節と唄は、微妙に音の高さや間合いがずれています。三味線のふしが唄を先行したり、ところどころ唄と異なった旋律となったりします。いわゆるヘテロフォニーの構造をもっていますが、これは日本の音楽ではとても大切な表現方法です。今回こうした構造を小学3年生が理解することとは望んでいません。しかし、唄を覚えるときに三味線の音をたより歌ったり、その際、三味線との音高の違いや三味線の音に遅れて出ること気づいて練習したりすることは重要です。

## Ⅶ 授業構成

### 1 どのような題材か

～どんなふううたおうか

ちんちろきりきり りんりんがちゃがちゃ すーいっちよん～

### 2 なぜこのような題材か

ちんちろりん、きりきりきりきり、りんりんりん、がちゃがちゃ、すーいっちよんといった虫の声を核としながら、お師匠さんのうたう「蟲の聲」を覚え、歌うことができるようにしていきます。児童がお師匠さんの唄を全感覚で受け止め、表現を模倣し、「どのようにしたらお師匠さんに近づくのだろう」といった問題意識のもとに何度も練習し、少しずつ自分の唄としていくことを期待します。

### 3 ねらいは何か

授業の核は、お師匠さんの模倣を繰り返すことにあります。その基本は、児童がわらべうたを覚える時のような「まるごと学習」であり、日本の伝統的な「お稽古」の形にあります。従って、児童への投げかけも「蟲の聲を歌おう」「お師匠さんはどんなふううに歌っているのだろう」といった内容が中心となります。リズムやメロディ、強弱などの音楽の構造を分析的に捉えて、そこから表現の工夫をするといった方法は採用しません。(こうしたやり方を否定しているわけではありません。逆に西洋音楽の学習では、きわめて重要な方法だと思います。)

児童が授業を通して獲得する内容は、授業の過程と最終的な児童の唄の表現からにじみ出てくるもので、教師はこの「にじみ出てくるもの」を授業のそれぞれの場面においてつかみとり、意識化させ、児童とお師

匠さん、児童相互の橋渡しをしながら交流を促し、学びが成立するよう働きかけていきます。

それでは、何が「にじみ出てくる」のかといったことになりませんが、「日本の唄」として長唄手ほどき曲「蟲の聲」を学習するわけですから、そこから必然的に生まれ出る長唄手ほどき曲としての「蟲の聲」の音楽的な特性であり、そこから生まれる唄の持つ雰囲気や情緒になります。音楽的な特性は、具体的には、VI章「蟲の聲の教材性」で述べた内容をあげることができます。もちろんこれらは、それぞれ別々に分解して考えることはできなく相互に有機的に関わっているものですが、整理して記述するとすれば次のような項目があげられます。

- ・自分の素の声、話し声を大切に自然な発声
  - ・言葉やふしの表現  
(発音や声の音色、ことばのひびき、ことばのリズム、抑揚や節回しの表現、拍の頭から少し遅れて歌う、日本的なふし)
  - ・姿勢、息の使い方
  - ・拍の感じ
  - ・三味線と唄とのずれ、合い方
- これらが醸し出す雰囲気や情緒をそれぞれの児童が感じ取ってくれたらと願っています。

#### 4 どのような流れになるか

全3時間の学習計画です。

##### 1) 1時間目：ことばの表現 ふしのまとまりをつかむ

<聴く><真似る>

- ・「蟲の聲」の言葉の響きを感じながらみんなで声を出して読んで覚える。
- ・お師匠さんの師範を聴く。
- ・お師匠さんについていながら、ふしの概略を覚える。
- ・わかったこと、思ったことを書き留める。

##### 2) 2時間目：ふしの特徴をつかむ

<聴く><真似る><工夫する>

- ・前時においてわかったこと、思ったことを共有する。
- ・お師匠さんの唄を聴く。
- ・グループに分かれて、練習する。
- ・どんなふうに歌えばよいか、表現の工夫をする。
- ・譜に覚え書きを書く。友達と交流する。
- ・わかったこと、思ったことを書き留める。

##### 3) 3時間目：ふしを自分のものにして発表する

<発表する><自分のものにする>

- ・前時においてわかったこと、思ったことを共有する。
- ・お師匠さんの唄を聴く。
- ・工夫する所を譜に書き留める。
- ・グループに分かれて練習する。
- ・グループ内でそれぞれの虫毎に担当を分担し、表現の工夫をする。
- ・譜に覚え書きを書く。友達と交流する。
- ・発表会をする。
- ・わかったこと、思ったことを書き留める。

#### 5 学習指導要領との関連はどうか

本題材は、学習指導要領の多くの指導事項と関係していますが、直接的には以下の事項が相当します。

- (1) ♪ 範唱や範奏を聴いて演奏すること。
- (2) ♪ 歌詞の内容にふさわしい表現の仕方を工夫すること。
- (3) ♪ 呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない声で歌うこと。

6 授業の流れと評価はどのようになるか

お師匠さんから口うつしで教えてもらうことにより、児童はだんだん〈何か〉がわかっていきます。授業者としては、その〈何か〉には、3のねらいで述べた内容になります。これらのねらいを時系列でもう少し細かく書き出してみます。

○1時間目

- ・「蟲の聲」の言葉を声に出して読み、覚えることができる。  
(言葉のリズム、音色、発音、ひびき、これらが生み出す雰囲気)
- ・「蟲の聲」のふしをお師匠さんについておよそ歌うことができる。  
(自然な声の出し方、ふし回し、姿勢、息の使い方、抑揚、日本的なふし、これらが生み出す雰囲気)

○2時間目

- ・「蟲の聲」のふしをお師匠さんについて歌うことができる。
- ・2つのグループに分かれて練習し、「りんりん〜」からのふしをどうしたらお師匠さんに近づくことができるか工夫する。(声の出し方、音色、発音、ひびき、ふし回し、抑揚、三味線から少し遅れて歌う歌い方、日本的なふし、これらが生み出す雰囲気)

○3時間目

- ・グループの中で、虫の担当を次の4つの部分にわけ。  
「りんりんりん〜すずむしが」「きりきり〜くつわむし」  
「うまおいむしも〜すーいっちょん」「ちんちろちん〜ちろちりん」
- ・グループの中で、それぞれの虫毎に担当を分担し、その部分の表現を工夫する。(声の出し方、音色、発音、ひびき、ふし回し、抑揚、三味線から少し遅れて歌う歌い方、日本的なふし、これらが生み出す雰囲気)
- ・グループ毎に発表して成果を聴き合う。

評価は、二つの側面から行うことができると考えます。すなわち、児童の表現(身体、身体知)と言語・記述による表出です。前者はパフォーマンスによる評価(表現の工夫をしている実際、発表演奏)、後者は、発言や記録による評価(わかったこと、思ったことの記述、譜への記載)です。

<題材の評価規準>

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
お師匠さんの歌う「蟲の聲」に耳を澄ませ、意欲的に表現しようとする。	「蟲の聲」の音楽の特性を感じ取って、お師匠さんに近づくように表現を工夫する。	「蟲の聲」の音楽の特性を生かした表現ができる。	お師匠さんの歌う「蟲の聲」を聴き、音楽の特性について発言したり書いたりする。

<具体の評価規準>

○1時間目

①「蟲の聲」のふしを覚えることに意欲的である。	①お師匠さんの表現の特徴を感じ取る。	①「蟲の聲」の「りんりん〜」からのふしをお師匠さんについておよそ歌えるようになる。	①お師匠さんの歌う「蟲の聲」を聴き取っている。
-------------------------	--------------------	-------------------------------------------	-------------------------

○2時間目

②「蟲の聲」の特性をつかみ、表現することに意欲的である。	②お師匠さんの表現の特徴をつかんで「りんりん〜」からの部分を工夫する。	②「蟲の聲」の特徴を「りんりん〜」の部分から工夫して歌えるようになる。	②お師匠さんの「蟲の聲」を聴き、その音楽の特性をつかむ。
------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------

○3時間目

③「蟲の聲」の発表会をすることに意欲的である。	③自分をつかんだポイントの表現を工夫する。	③自分のつかんだポイントを工夫し、発表できる。	③友達の唄を聴き、工夫したことがわかる。
-------------------------	-----------------------	-------------------------	----------------------

7 実際の展開はどのようになるか

1) 1時間目：平成17年11月1日

(1) ねらい

<聴く><真似る>

- ・「蟲の聲」の「りんりん〜」からのふしをお師匠さんについておよそ歌うことができる。

(2) 展開

学習内容	教師の働きかけ	児童の活動	留意点【規準<方法>】
○ことばの暗唱	○掲示した「蟲の聲」のことばを読み上げ、繰り返し覚えさせる。 ・児童に仮名書をそのまま見せて読ませる。 ・読み方や意味の難しいところを考えさせたり教えたりする。 ・教師のあとに続き繰り返し声に出して読ませる。	○掲示されて「蟲の聲」を見ながら、教師のあとに続いて読み上げ、暗唱する。 ・掲示されたことばをよむ。 ・読み方や意味がわからないところを考える。 ・繰り返し声に出して表現し、覚える。	・墨で清書された「蟲の聲」の声のかな表記を黒板に掲示する。 ・ことばのリズムやひびきを大切に読み上げる。 ・呼吸や息を合わせて、全員一緒に声を出させるようにする。
○お師匠さんの師範	○お師匠さんに「蟲の聲」を師範していただく。 ・児童の前にお稽古の形で座り、範唱する。 ・児童の反応を見ながら数度範唱し、少しずつ後についてくるように誘う。	○お師匠さんの師範を聴く。 ・お師匠さんの模範演奏を、背筋を伸ばして聴く。 ・何度か聴いた後、わかるところを口ずさんでいく。	・最初はしっかりと聴き取ることを重視し、次第に真似ていくようにする。 【エ①<観察>】 ・姿勢は正座を基本とするが、児童の様子を見ながら適宜判断する。
○模唱・繰り返し	○「りんりん〜」のふしからお師匠さんにお稽古をしていただく。 ・範唱—模唱を繰り返し、覚えさせる。 ・わからないところは、部分的に抽出して教える。	○「りんりん〜」のふしからお師匠さんの唄を口うつしで覚えていく。 ・わかるところから、だんだんと覚えていく。 ・歌い方がわからないところは質問する。	【ア①ウ①<観察><演奏>】 ・児童の様子を観察し、適宜お師匠さんとの橋渡しをする。 ・必要に応じて、部分練習を依頼する。
○学習のまとめ	○学習を通して理解した事項（曲の特性）や感じたことを記録させる。	○わかったこと、曲の感じ、思ったことを学習プリントに記入する。	【イ①エ①<1時間目学習プリント>】 ・まとめて、次時に全員で学びを確認し合う。

2) 2時間目：平成17年11月4日

(1) ねらい

<聴く><真似る><工夫する>

- ・「蟲の聲」のふしの前半の概略を覚える。
- ・「りんりん〜」からのふしをどのようにしたらお師匠さんに近づくか、表現を工夫する。

学習内容	教師の働きかけ	児童の活動	留意点【規準<方法>】
○学習成果の共有	○前時の学習プリントを整理し、児童がわかったこと・感じたことを伝える。 ・前時の学習プリントの内容から、いくつか紹介する。	○友達は何を学んだか聞き、学びを共有する。 ・普段の発声との違い、いろいろな声の音色、節回しの特徴などについて、友達の感想を確認し、共有する。	・学んだ内容を共有するように、できるだけ具体的な例を用いて全員で確認する。
○前時の復習	○お師匠さんに前時の復習をしていただく。  ・お師匠さんに前時の部分を歌っていただく。 ・できないところは区切って少しずつ口移して伝える。	○お師匠さんと一緒に「りんりん〜」からのふしを歌う。 ・お師匠さんの歌い方をよく聴く。 ・顔の表情、身体の動きなど全体を真似る。	【エ②<観察・学習プリント>】 ・「りんりん〜」からの虫の鳴き声の部分について、およそ歌えるようにする。
○前半部分のふしの学習 ○「りんりん〜」からのグループ学習	○お師匠さんに前半部分のお稽古をしていただく。 ○2つのグループに分け、それぞれで「りんりん〜」からの歌い方を繰り返し指導する。 ・長唄倶楽部の学生を先生にして練習させる。 ・お師匠さんには、2つのグループを順番に見ていただく。 ・少しずつ、児童だけでも歌えるようにしていく。 ・それぞれの虫ごとに分担を決めて、歌わせる。	○前半部（りんりんの前まで）の概略を覚える。 ○2つのグループごとに、「りんりん」からの歌い方を工夫する。  ・どのようにすればお師匠さんの歌い方に近づくか、考えながら歌う。  ・工夫することを譜に覚え書きとして書き留めながら歌う。 ・決められたところを個人で責任をもって歌えるように練習する。	・前半部は、概略を覚えれば良いこととする。  【ア②<観察>】 ・譜を用意し、必要事項を記入させる。  【イ②ウ②<観察・譜>】 ・必要に応じて、友達との交流の時間をとる。 ・それぞれの虫ごとに歌う児童を決め、練習させる。
○学習のまとめ	○学習を通して理解した事項（曲の特性）や感じたことを記録させる。	○わかったこと、曲の感じ、思ったことを学習プリントに記入する。	【イ②<学習プリント>】

## 3) 3時間目：平成17年11月8日

## (1) ねらい

&lt;発表する&gt;&lt;自分のものにする&gt;

- ・グループの中でそれぞれの虫毎に担当を分担し、その部分のより細かな表現を工夫する。

学習内容	教師の働きかけ	児童の活動	留意点【規準<方法>】
○学習成果の共有	○前時の学習プリントを整理し、児童がわかったこと・感じたことを伝える。 ・前時の学習プリントの内容から、いくつか紹介する。	○友達が何を学んだか聞き、学びを共有する。 ・言葉の表現や発音、お師匠さんの表情、節回しなどについて、友達の感想を確認し、共有する。	・学んだ内容を共有するように、できるだけ具体的な例を用いて全員で歌いながら確認する。
○前時の復習	○お師匠さんに「りんりん～」から復習していただく。 ・虫の鳴き声の部分について、しっかりと歌えるように指導する。	○お師匠さんとともに「りんりん～」から復習する。 ・特に自分の担当部分については、きちんと歌えるように気をつける。	・自分の担当部分を確認する。  【ア③<観察>】
○グループ練習	○二つのグループに分かれ、長唄倶楽部の学生を先生に練習させる。 ・「りんりん～」から一度合わせる。 ・担当の虫毎に、分担部分の表現を工夫させる。	○グループに分かれて練習を繰り返す。 ・それぞれのグループで「りんりん～」から合わせる。 ・担当の虫毎に、担当部分を何度も練習する。	【イ③ウ③<観察、譜の記録>】  ・輪になって顔を合わせながら練習させる。 ・必要に応じて、譜に覚え書きをさせる。
○発表会の約束事	○お師匠さんに発表の約束事を教えていただく。 ・座り方、順番、お扇子の持ち方、挨拶など。	○発表についての約束事を覚える。 ・お師匠さんより、座り方、お扇子の扱い、挨拶などを教わる。	
○発表会	○グループ毎に発表させる。 ・伝統的な発表の形をできるだけ踏襲する。	○グループ毎に発表し、友達の工夫を聞き合う。 ・どのような点が工夫されているかに注意して聴く。	【ウ③<演奏>】 【エ③<発言>】
○学習のまとめ	○学習を通して理解した事項（曲の特性）や感じたことを記録させる。	○わかったこと、工夫した点などを学習プリントに記入する。	【イ③エ③<学習プリント>】

## 8 学習プリントに見られる児童の学び

以下に、1時間目と2時間目の学習プリントに記載された児童の学びをすべて書き出し整理しました。すでにおわかりのように、この授業は、いわゆる「旋律」「リズム」といったように、特定の音楽の要素に焦点化して進めるものではありません。お師匠さんから口うつしで教えてもらうことにより、児童はだんだん<何か>がわかっていきます。その<何か>を整理し、共有していくことが重要になってきます。プリントに記録された内容を見ると、最初にあった「難しい」という思いが減少し、「蟲の聲」の音楽の特性をより深くつかみ取るとともに、長唄に対する表現の工夫が具体的になってきたことが読みとれます。

## 1) 1時間目

## ○おもしろい、難しい、時代性（昔の歌）、日本の歌

- ・わたしは、昔の歌みたいに感じました。
- ・はじめて、昔の日本の歌を聞いてとても昔の日本というかんじでとてもすごかったです。
- ・昔の歌っていう感じがすごかったです。
- ・「とてもむかしの歌だなー」と思いました。
- ・昔の歌ってかんじ?みたいなかんじでした。
- ・すごく日本の感じました。
- ・かんじたことは、日本の声だなあーとかんじました。
- ・感じたこと：ものすごい古い時代のうたとわかった。
- ・むずかしかった。
- ・むずかしかったです。
- ・とってもむずかしかったけど、歌えたのでよかったです。
- ・わかったこと：すごいむずかしかった。
- ・蟲の聲はふつうのお話でうたって、うたいやすそうだったけどむずかしかったです。
- ・昔の字があった。おもしろい曲だった。
- ・おもしろいうただとおもいました。
- ・はじめて、昔の歌をうたったけど、すごいいい歌でよかったです。

## ○音楽の特性

- ・わかったことは、虫のうたはすごいとおもった。
- ・日本のうたは、こんなにちがうとはしりませんでした。
- ・日本の歌い方が少しちがった。
- ・わかったこと：言葉、虫の数、感じたこと：ねいろ
- ・虫の声がたくさん聞こえてくる感じで、すごくたのしかったです。
- ・むしがほんとうにいるようなかんじもした。
- ・とくちょうは、今までならってきた歌とちがって和風のイメージでした。
- ・日本の声とかんじた。いろいろな虫のきれいなこえがとくちょうだと感じた。
- ・このうたのなかに、ちゃんとした虫がいてびっくりしました。あとわかったことは、いろいろな虫の声があまりわたしは、わかんなかたので、いろいろな虫の声がわかってよかったです！
- ・「蟲の聲」というだいいから、むしのことが、いっぱいかいてあって、それが、とくちょうなんだなあと、おもいました。
- ・いろいろな虫がでてきておもしろかった。
- ・なんだかいろいろとおもしろい音があった。
- ・歌にいろんな虫の鳴き声があっておもしろい歌だった。
- ・いろんな「蟲」の音がでてきれいだった。いろんな「聲」がでていた。
- ・ことばはなんかほんとうに蟲の聲がきこえてくるような感じがした。
- ・わかったことは虫の声はいろいろなこえがあるんだとわかった。かんじたことは、声がいっぱいなのでもむずかしいなあとかんじた。
- ・感じたこと：はずむ所やのばす所やのばす所があってむずかしかったです。

- ・ 蟲の聲はこういとうく長があったと思います。声が高かったりひくかったです。お腹から声を出して気持ち良かったです。(感想)
- ・ そのむしの声が、言葉になっていた。それと、歌を教えてもらって、すごく言葉がおもしろいな、と
- かんじた。
- ・ 思ったより歌うおとが多くてびっくりした。
- ・ ながさやこえがおもしろかったし、とくにながさがむずかしかったです。さいごが、いきがひといきでしちやったかたいきがきれそうだった。
- ・ 私は「ふしぎな歌だなあ。」と思いました。さいごの「おもしろや」がながくて、「や」のところごと
- 中で息切れしてしまいました。でも、おもしろかったです。
- ・ すいーっちょんのすいーのところで息がもうきれちゃったけどたのしかった。
- ・ はずむようなかんじていろんな虫のとくちょう(声)がまざっていきれいだった。
- ・ すごいとくちょうで、あげたりさげたりするところもあって、すこしむずかしかったです。
- ・ すいーっちょんのところが、のぼしていたけどわたしは、あまりのぼしていなかったの、これからは
- 気をつけていきたいです。
- ・ 蟲の聲は、とてもゆったりとした感じがした。
- ・ シャミセンと同じに歌わないでちょっと音とはなしたりすることがわかりました。
- ・ 私たちがふだん歌っている歌ではなく声の出し方や音がちがっていておもしろかった。字が今の字で
- なかったの、歌い方もかえたほうがいい？
- ・ 声が歌う声じゃなくて、話す声でいつもは歌う声なのでちょっとむずかしかったけど、たしかに日本
- の歌は話す声の方があっていました。

## ○その他

- ・ あまりよる声とかきけないからふしぎに思った。
- ・ 今つかっている文字がつかってあった。
- ・ 虫のなき声や虫の名前が曲にはいっていた。
- ・ あまりよる虫の声とかがきけなかったから、いっぱい虫の声があるんだと思いました。

## 2) 2時間目

## ○全体的なこと、感想

- ・ どんどんいろんなことがわかってきた。自分で先生にちかずにこれた。
- ・ 私は日本の昔の歌だなってまた思いました。
- ・ 昔の歌が少しわかった。
- ・ わかったこと：さいしょにいうところのいみがわかった。
- ・ 分かったこと：虫のこえ。
- ・ 1時間目よりたくさんむしのこえがわかりました。
- ・ かんじたことは、むずかしかしいなあとかんじました。
- ・ 虫になりきってたのしそうにしていることがわかった。
- ・ 歌ってみてもっと虫の聲がわかってきた。
- ・ このうたのいみ(みせでうるみみたいなこと)がわかってよかった。そうすればよく、ふんいきやリズム
- が分かるからでした。
- ・ ことばや音がむずかしくて大へんだったけど歌を歌えてよかったです。
- ・ 感じたこと：はやかったりした。
- ・ うたっていると、みんなでわかれて歌うのもいいなと、おもいました。
- ・ 自分がやることは大きくやってみた。
- ・ うまおい虫だから、イメージしてうたった。

## ○ひびき

- ・ まえよりひびきがよかった。
- ・ グループでいいひびきがでた。

- ・感じたこと：ひびきがきこえた。
- ことばの表現，音色
  - ・虫の声のように，うたうと，よくなりました。なので，もっとみつけてみたいです。
  - ・「蟲」のことばがいろんな音でていた。
  - ・このうたは続けて何かの言葉を言うんだと思いました。
  - ・虫の声をだすと声だけでも虫がわかるときがある。
  - ・言葉を話すみたいにするのが大へんでした。
  - ・がちゃがちゃさわぐのところがそだけががちゃがちゃないでいて，おもしろかった。
  - ・わたしのはんは，きりぎりすとくつわむしだから，話す声で，この虫みたいに，工夫しました。
  - ・ぼくはうまおひむしのグループで，ちんちろりんというこえになりながらうたう。
- 声の出し方，声の質，息や身体操作
  - ・ふつうの声でうたった。
  - ・ふつうのこえでうたえばいいリズムでうたえることがわかった。
  - ・わたしは，2時間目に歌う声ではなく，話す声でうたっていることにやっとわかりました。
  - ・いきをしっかりとすう。
  - ・口を大きくひらいたこと。おなかから声を出した。
  - ・したの動きをよくみて同じ「した」の動きにすることです。
  - ・口をはっきりあける。
  - ・工夫したこと：おなかから声を出して。
  - ・プレスをすると息が続くからプレスは大切！
  - ・うまおひむしもあとおふてちよんちよんちよんちよんすーいっちょんのところをするので少し息がきれちゃった。
  - ・いったん息を切って歌う所もあるので，今度やった時も息を切る所を気をつけてうたいたいです。
  - ・先生がいったように，おもしろやの所は「ろ」の所で息をするとういことがわかりました。
- ふし・節回し
  - ・歌の音ていが，ふつうのこえでやるみたいなのが，日本てきだなと感じました。
  - ・とてもこえがおもしろかった。たかかったりひくかったりしてむずかしかった。
  - ・すいっちょんのところをながれるようなかんじて，ゆったところ です。
  - ・まえの「つゆふかき」のところはふつうにしゃべるようなところだったけど「りんりんりんりんりんりん…」のところからはほんとの歌？のよう。
  - ・話すように歌った所と，ひくい所は，ひくくしました。
  - ・工夫したこと：すずふるすずふるすずむしのところをくふうした。
  - ・自分がいう「りんりんりんりんりんーりん すずふるすずふるすずむしが」のところを工夫しました。
  - ・のぼす所がたくさんあって，はずむ所もたくさんあった。
  - ・たかいひくいをいしきして自分のやくをいしきして歌った。
  - ・虫の声だけじゃなくて，人の声もはいて，よくいみもわかって，ここはこういう音ていだ！とすぐにわかってよかったです！
  - ・昔とかがよくなってきたしなにかかんべきにできそうなきがしました。それにちよんちよんすいっちょんのところがどうしても頭があげることがわかった。
  - ・あんまりおなじかんじがしたから昔の調せつをし上げたり下げたりした。
  - ・のぼすところをのぼしたらそのとうりにがくふのようになできた。
  - ・のぼすところがおおかった。虫の声がおもしろかった。
  - ・私はすずむしたんとうなんですが，すずふるすずふるすずむしがのがを高くしました。
  - ・「のべよりとらえきて，ちまたに」というふしのところが，音ていがひくくてびっくりしました。
  - ・さいごの時に，ひくくなったり高くなったりするところを気をつけたいです。
  - ・ひくい声の曲だった。

- ・高い声とひくい声をわけた。
- ・声のあげさげをする。
- ・おなかからひくいこえやのぼすところです。
- ・おんていがむずかしい。
- ・うまおひむしもまでは、上がってあとおふては下がる。
- ・すーいっちゃんのところを上から、下にやるように工夫しました。
- ・わかったことや感じたことは、「うまおひむしもあとをふて」の所がのびるように感じました。
- ・工夫したことは「すーいっちゃん」をのぼしたことです！！
- ・「拍子そろへておもしろや」の所のそろへてのあとが、たくさんおくのでむずかしかったです。
- ・ぼくたちがやるすーいっちゃんをリズムあわせてよくできた。
- ・高い、ひくいをいしきしてできたと思うので、グループの声がそろろうようにがんばりたいです。

#### 9 おわりに

以上、日本の伝統的な歌唱を学校の音楽授業でどのように学習すれば良いかについて、長唄でほだき曲を例に、理論的な考察と具体的な授業プランを提供した。今後、子どもの学びの様相を分析し、獲得された学習内容を明らかにするとともに、音楽授業における伝統音楽の学習方法について理論と実践の統合を目指していきたい。

#### 注

- 1) 蘆原英了『舞踊と身体』新宿書房 1986年 pp.256-263
- 2) 興味のある方は、次の文献をご覧ください。生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会 1987年
- 3) 以下の文献を参考にしていただければ幸いです。伊野義博「日本伝統音楽の特性を把握するための諸課題」『新潟大学教育人間科学部紀要 第8巻第1号』2005年 pp.87-95。伊野義博「日本音楽のカリキュラム構築にむけて～日本人の認識法や音楽的感覚によるアプローチ～」『新潟大学教育人間科学部紀要 第9巻第1号』2006年 pp.87-99
- 4) ちなみに歌唱共通教材の文部省唱歌「虫のこえ」は、明治43年に「尋常小学読本唱歌」において発表されています。この時の歌詞についてですが、二節の冒頭は「きりきりきりきりきりきりぎりす」でした。井上武士編『日本唱歌全集』（音楽之友社）には、作詞・作曲者不詳とあります。

資 料

\*資料

学習プリント

どんなふううたおうか

ちんちろきりきり りんりんがちゃがちゃ すーいっちょん

名前 \_\_\_\_\_

○1時間目

わかったこと・感じたこと

「蟲の聲」は、どんなとくちょうがあったかな  
「蟲の聲」はどんな感じがしたかな

○2時間目

・わかったこと・感じたこと

1時間目よりたくさんわかったぞ

・工夫したこと